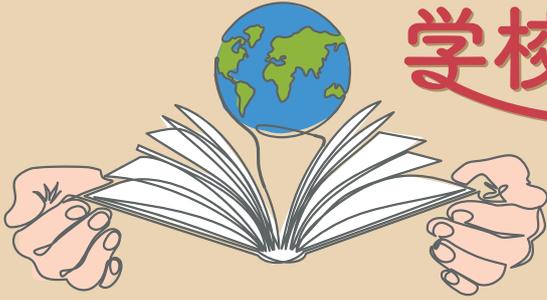


世界のリアルを集めた

学校図書館へようこそ



学校図書館営業部 宇佐美俊介

■追いつけたスーパースター

2019年4月下旬、言いようのない喪失感に包まれながら私はシアトルのT-Mobile Parkにいた。メジャーリーグ名物のホットドッグとビールに舌鼓を打ちながらも心は晴れなかった。理由はただ一つ。憧れ続けたスーパースターの不在。

この年の3月21日、東京ドームでの開幕2戦目、イチロー選手は現役を引退した。「イチローのプレーをアメリカで観たい」という私の夢はついで叶わなかった。

話を遡る。私は小学2年生の時に地元の少年野球チームで野球を始めた。小さな町に4チームがひしめく、今思えば異常に野球熱の高い地域だった。中学校に入ってから迷わず野球部に入部したが、3学年合わせて総勢76名という大所帯で、1年生の仕事は殆ど声出しと球拾いに尽きるが、3年生の先輩がバッティング練習をするときに、個人的に呼ばれてバッティングピッチャーをさせて貰えることが最大の喜びであった。練習の合間に先輩から幾度となく聞かされたのは、同じ郡内(当時)の某中学校が全国大会に出場するほどの強豪であること、郡大会でそのチームに勝たないと上の大会に出られないこと、そしてそのチームのエースピッチャーの球がべらぼうに速いこと、などであった。

1年生は試合に連れて行って貰えないので、そのピ

ッチャーを肉眼で見ることができなかったが、「どんな凄い選手なのだろう?」と思い馳せていた。ここまで書いたらもう大体察しがつくと思うが、その選手こそ、のち



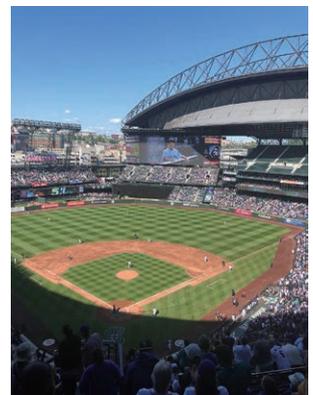
にメジャーリーグの記録を塗り替えることになるイチローこと鈴木一朗氏である。

シアトルでの滞在は1週間。4試合分のチケットを予約購入していたが、その期間中に、イチロー氏がマリナーズの会長付特別補佐兼インストラクターに就任することが報道された。「もしかしたら球場で姿を見られるかも」という淡い期待を抱きながら球場に通い続けた。

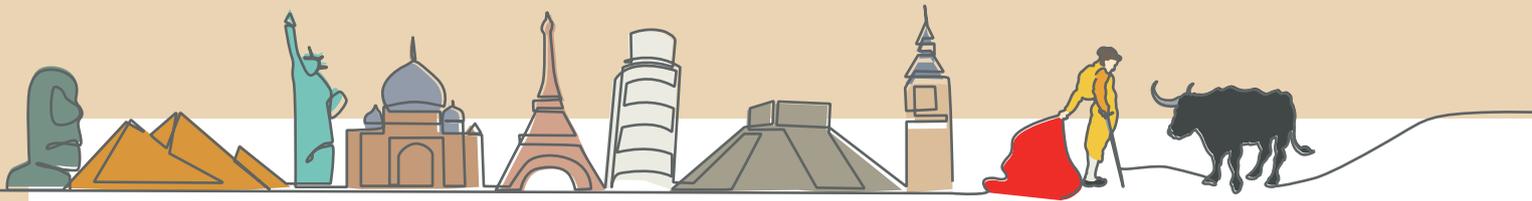
最終日の5月1日(現地時間)、人気球団シカゴ・カブズ戦。15時40分試合開始のため昼前にホテルを出て、気ままにシアトルの街を散策したり、レストランにふらりと入ってランチを楽しんだりしていた。余裕で球場に到着したら、試合前練習でイチローがバッティング・ピッチャーとして若い選手相手に投げていたとか、相手チームのダルビッシュ投手と談笑していたとかいう情報が入ってきて、またもや深いため息。嗚呼! もっと早く球場に来ればよかった! まあ仕方ない。どこまでも的を外すのが私の人生である。

ともあれ試合は中盤に差し掛かった。その時である。

攻守交代時にバックスクリーンのビジョンに目をやるとイチローの現役時代のプレー映像が映し出されている。打つ! 守る! 走る! イチロー特集か? そう思いつつと見ていると、画面が切り替わり、ベンチに佇むイチローの姿が映された。マリナーズ・ベンチに視線を動かすと背番号51番が目



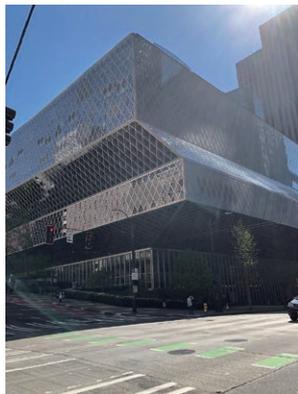
ビジョンに映るイチロー。右下のマリナーズベンチに背番号51番が見える。球場やホテルで何人かのアメリカ人とイチローについて話したが、彼がアメリカでどれだけ尊敬されているかを如実に感じた。



入った。立ち上がるファン。鳴り止まない大歓声。その声に応えるように後ろを振り返り、観客席に向かってゆっくりと手を振るイチロー。追い続けたスーパースターが目の前にいる。この日のことは一生忘れないだろう。)

■海外の図書館を訪ねて

シアトルに来た目的は野球観戦だけではない。図書館見学も大事なミッションである。まずはシアトル中央図書館 (Seattle Public Library - Central Library)。オランダ・ロッテルダム生まれの建築家、レム・コールハース率いる建築設計事務所OMA (Office for Metropolitan Architecture) によって設計された11階建ての図書館は、ガラスと鉄骨でできた多面体のデザインの無骨で奇抜な外観にまず目を引かれるが、内部では利用者のコンフォータビリティが徹底的に考慮されていて、複雑な構造はまるでテーマパークのようだ。



シアトル中央図書館。菱形のフレームとガラスが特徴的。雨の多いシアトルで自然の光を最大限に取り込めるよう設計されている。

「Books Spiral」と名付けられた螺旋状のスロープが6階から9階の開架書架を緩やかに繋げていて、そこを辿って全ての分類の本を順に見ていくことが可能だ。足元に表示された分類もわかりやすい。上階の10階「Reading Room」には静かに本を読む人々がいる。こんな光に溢れた空間で、普段忙しさにかまけてなかなか読むことができない長編小説を、浮世を忘れて読み耽りたいと思った。下階の5階「Mixing



青空が見える開放感のあるリーディングルーム。1日快適に過ごせそう。

Chamber」にはコンピューターがずらりと並んでいるが、ライブラリアンが常駐し、調べ物の相談にも乗ってもらえる。1階の児童書コーナー「Kids」には日本語の本がそれなりに充実していた。書架の上には手作りの人形のようなものが配置されていたり、子どもたちを楽しませる仕掛けが所々に施されている。「story hour room」と入り口に示された部屋は読み聞かせのスペースだろうか？



児童書コーナーには日本語の絵本も。人気作家の作品がズラリ！



こちらはアメリカの人気シリーズだろうか。公共図書館と思えないようなワクワクするような棚が作られている。

スタッフに館内の写真を撮っても良いかと尋ねたら、笑顔で「Sure！」と返ってきた。多くの観光客に同じように聞かれているのだろう。いずれにしても、こんなに居心地の良い図書館には生まれて初めて来た。近隣に住んでいたなら毎日でも訪れたいだろう。



デュイ十進分類法。世界でも多く使われている分類法。アメリカ合衆国では、公共図書館の95%が採用している。



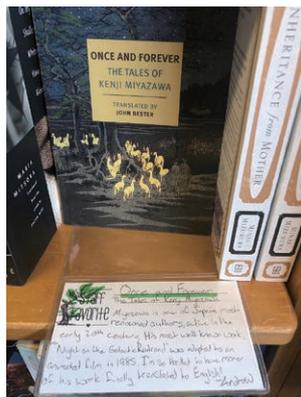
右奥に見える赤い階段に注目。4階の「red hall」へ繋がっている。室内は広く、アート感に溢れている。

次に訪れたのはワシントン大学スザロ&アレン図書館 (Suzzallo and Allen Libraries)。正面の外壁に、ダンテ・アリギエーリやウィリアム・シェイクスピア、アイザック・ニュートンなど、哲学・文学・科学分野の巨人たちのテラコッタ製の彫像が18体並んでいるのが目に入る。学問や文化のシンボルとして掲げられているのであろう。



ワシントン大学スザロ図書館。学問と文化への貢献の象徴として選ばれた人物の彫刻18体に注目してほしい。

この図書館には「ハリー・ポッターの hogwarts 魔法魔術学校のような」と形容される私語厳禁の読書室(自習室)がある。こういう空間も嫌いではないが、なぜかアウェー感を抱き、厳肅な雰囲気呑まれて部屋の中には入りづらかった。とはいえ、歴史の重みに押し潰されそうになりながら静かに学ぶ場が確保されているのは大学の図書館ならではである。少し息抜きがしたくなり、館内にあるスターバックスへ。言わずもがな、シアトル発祥の世界最大のコーヒーチェーンである。「Welcome to the Suzzallo Library Starbucks」とカウンター上のボードに書かれている。私は、モカ・フラペチーノを注文した。できあがった時、店員からファースト



図書館スタッフがお気に入りとして、宮沢賢治の作品を紹介してくれているのが嬉しい。ポップの文章を読むと、『銀河鉄道の夜』が1985年にアニメ化されたことに触れられている。



図書館1階にあるスターバックス。図書館は歴史ある建築物だが、スタバは2017年オープンなので新しい。

ネームで呼ばれてちょっと嬉しかった。

2019年の年末から2020年の年始にかけて、私はネパールのカトマンズを旅した。その時に訪れたのが Kaiser Library。事前情報なしに足を踏み入れたが、書架に並んでいる本が英語の本ばかりだということに軽いショックを受けた。ネパール語の本もあるにはあるのかもしれないが見つけられなかった。



ネパールの首都・カトマンズ中心部にある KAISER LIBRARY。2015年のネパール地震でここもかなりの被害を受けている。

日本や中国、そして韓国を除くアジアの国々は、高等教育を英語でおこなっているということは知っていたが、公共図書館の蔵書もその影響を受けているのだろうか？ネパール語の本を集めた公共図書館というものは存在しないのだろうか？ということ、前提として英語を身につけていなければ図書館にアクセスすることもないということだろうか？

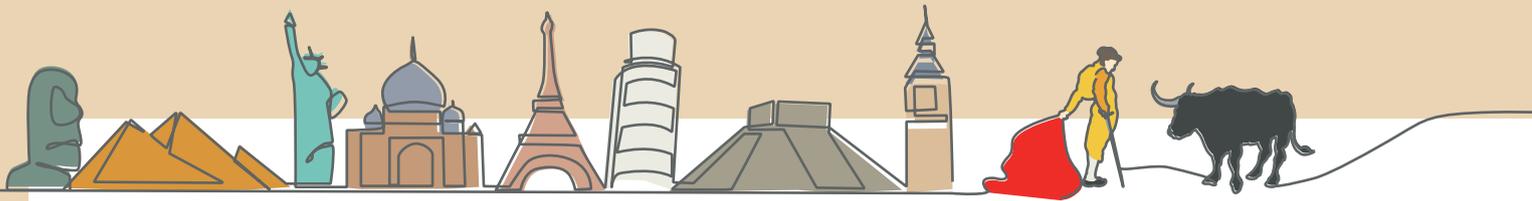
ネパールは地理的に中国とインドという2つの大国に挟まれた位置にある。言ってみれば緩衝国家だ。第二言語としてどの言語を身につけるかは、本来なら個人が人生設計を基にして戦略的に決めることだろう。



全体的に図書館の中は薄暗い印象だが、自然光が降り注ぐ明るい場所で学生が調べ物をしていた。

机上に堆く英語の本を積み上げて調べ物をしている男





性に目が釘付けになった。と同時に、ここに来る前に建築現場で背に籠を担いで土砂を運んでいる少女を見掛けたことをふと思い出した。世界を席卷する英語帝国主義の一段面を突きつけられたような気がした。

■母語の外へ

コロナ禍に突入する前の10年間（2010年～2019年）、私は先述のように世界を旅し続けた。訪れた国は18か国。その中で母語以外に様々な言語を駆使する人々に出会った。

ロサンゼルスで朝食を買いにコンビニエンスストアへ行った時、レジカウンターの中で店員同士、スペイン語でヒソヒソと会話をしているのが聞こえた。「ヒスパニック系の人たちかな？スペイン語で挨拶してみようか」と思い、サンドイッチと牛乳を手に取りレジに差し出したら、急に英語に切り替えて客対応を始めた。流暢な英語である。ロサンゼルスという地名は、スペイン語で「Los Angeles（天使たち）」という意味であり、ここは地理的にもメキシコ国境に程近い。メルティング・ポットやサラダボウルという言葉が脳裏に浮かんだ。

スペイン・バルセロナの有名な観光地でアントニ・ガウディの作品群の一つでもある「グエル公園」へ行くと、「Catalán」「Castellano」「Inglés」と言語名が並記されたタグを首から提げた女性ガイドが、世界各国から訪れた観光客に対して園内の案内をしている。「カタルーニャ語・カスティーリャ語（スペイン語）・英語の3つの言語で対応できますよ」というインフォメーションである。私とそのガイドに近づいたら、「Can I help you?」と当然のように英語で切り返してきた。だが、こちらが少しスペイン語を解すると分かったら瞬時に言語を切り替えた。一体この人の頭の中はどのような構造になっているのだろうと私は驚嘆し、畏敬の念を抱いた。

サッカー・ポルトガル代表のクリスティアーノ・ロナウドや元フランス代表のジネディーヌ・ジダンが、嘗てレアル・マドリッドに所属していた時、試合後にメディアに対して、流暢なスペイン語を駆使してインタビュー

に答えていた姿を思い出したが、私の中でヨーロッパの言語併用主義の衝撃は、今もまだ消えていない。確かに、ポルトガル語もスペイン語もフランス語も、ロマンス諸語という同じ言語系統に属する言語である。だがいくらか似ているとは言え、そんなに簡単に操れるものなのだろうか？

余談だが、中田英寿や長友佑都のイタリア語、長谷部誠のドイツ語、久保建英のスペイン語など、日本のサッカー選手がヨーロッパのサッカーリーグで結果を出すためには、その国の言語を習得することが前提として必須なのかもしれない。

逆にベトナムやラオス、タイ、カンボジア、ミャンマーなど東南アジア諸国では、日本語を話す人々に何度も遭遇した。こういう方々に出会う度に感じたのは、自分は彼らの国の言葉を学ぶ必要はないのかということ。円滑なコミュニケーションのために費やされる努力は、双方向におこなわれなければフェアではないのだとしたら、日本語を話す外国人の前で上から目線でふんぞり返っていて本当に良いのだろうか？アメリカ人が外国語を学ばないことと同様に日本人は東南アジア諸国の言葉を学ばない。

そしてあまり触れたくはないが、昨今の日本の英語教育改革の目も当てられないような迷走ぶり。「文法ばかりやっているから会話ができない」とか、そんな瑣末なことをいつまで言っているのだろうか。さらに付言するならば、外国語に堪能な人を指す“ペラペラ”という品性に欠けた言葉。母国語（日本語）の発言が“ペラペラ”な人は、仮に外国語を習得したとしても、せいぜい“ペラペラ”な言動を撒き散らすだけだ。知性が滲み出ることのない“ペラペラ”の薄っぺらな語学力など国際社会では何の意味も価値も持たないことに、一体いつになったら気づくのだろうか。

ここまで、諸外国の人々が日常的に使用する言語について考察したのは、人間は物事を考える時に言葉を使用することを宿命づけられているから、言葉を根拠にしなければ思考を深めることができないことは自明だから、

である。作家の片岡義男は名著『日本語の外へ』の中で次のように述べている。

「人がなにかを考えたり思ったりするとき、そこにはかならず言葉がある。いちいち言葉なんか必要ないよ、というのが日常的な実感かもしれないが、言葉なしには人間はほとんどなにも出来ない。そして自分が自由に使うことの出来る言葉、つまり母国語の構造と性能の内部で、そこから多大な影響を受けつつ、人は日々を生きていく。いつもどのような言葉をどんなふうに使っているかによって、思考の程度や範囲そして方向などが、母国語の性能の守備範囲内で決定的に決まっていく。母国語の構造や性能に一定の傾向が特徴的にもしあるなら、その傾向に日々さらなる磨きをかけるかたちで、人は自在に母国語を駆使して日常を送る。日常の母国語とはそのような言葉だ。」(片岡義男、1997『日本語の外へ』筑摩書房、449頁)

「母国語によって長い年月をかけてつちかわれた思考や発想の外に出ることは、ごく控えめに言っても、至難の業だろう。その難しさや面倒さにくらべれば、思考や発想は母国語のまま、それを薄皮一枚の英語にくるんで喋ったり書いたりするほうが、はるかにたやすい。外国語を学び始めたときの、わずかな単語とごく限られた構文しか自由にならないもどかしい苦しさの次の段階には、多少は使えるようになった英語で母国語の思考と発想をくるみ込むという、落とし穴が待っている。この落とし穴は魅力的かもしれない。なぜなら、自分の側の論理をいくらでも主観的に利己的に自在に表現し抜く母国語の、かりそめの代用品にはなり得るから。」(同上書、357頁)

■学校図書館は世界の多様性に向かって開かれているか？

諸外国の日常の言語使用状況を見ても、唯一無二のグローバル・スタンダードなどというものはこの地球上に存在せず、グローバル化とは単にローカル化の積み重ね

でしかないということがわかる。ローカル化の一つ一つに対して、リスペクトを持って丹念に学んでいかなければ、世界全体の有り様を正確に把握することもできないだろう。

そしてそのような想像力もまた、言葉を根拠としている。老若男女問わず読解力の低下が懸念されて久しいが、インターネット等の発達により、人々が世間に向けて言葉を発するハードルは低くなっているように感じられる。言葉を操るセンスは洗練を極めていように見受けられる。

ただ、そこに論理や哲学はあるか？自分の頭で考え抜いた言葉は並んでいるか？という心許ない。SNS上には、深く考えることとは無縁なショートカットされた思考を軸とした片言隻語が飛び交い、無限にコピー＆ペーストが重ねられ、もはや誰の責任において発せられた言葉なのかさえ見分けがつかない。言葉の誤用や誤字脱字も然り。フェイクニュースは日々どこからともなく生産され、名もなき民は誰かの失言や失策をひたすら叩き、失笑し溜飲を下げる。悪い奴は成敗してしまえ、嫌いな人間は社会的に抹殺してしまえ、という不穏な声が聞こえてくる。日本の言論空間の質の悪さは現在、考えられる限りにおいて最悪の状況と言っている。

中庸という言葉がある。対立する二項のどちらかが正しいと決めつけるのではなく、その両極端の真ん中辺りで踏みとどまる知性。答えのない中庸を探ることが数多の社会問題を解決していくうえで決定的に重要だ。2022年2月24日に開始されたロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻についても、その背景にあるNATOの東方拡大の歴史的経緯を理解せずに、善悪二元論にわかりやすく要素還元しているような報道が目立つ。ウクライナ国旗の黄色と青にライトアップされた世界各地の



ランドマークの象徴的な映像を見て違和感を抱いたのは私だけではないはずだ。ロシアを一方向的に非難して経済制裁するだけで戦争が止まるなら、最初から戦争など起こるはずもない。当事者双方が譲歩しなければこの戦争は永久に終わらない。戦争を止めるための知性を持った人間なら、国旗の二色を掲げて連帯を示すより先に、歴史に学び中庸を探るだろう。

そして、学校や職場では依然として正解信仰が根強い。正答を当てた数を競い合うような日本の学校の評価システムは、その副産物として視野の狭さや認知の歪みをもたらす。問いを自前で設定する能力、答えの簡単に出ない問題を粘り強く考え続ける力、情報を日々アップデートする能力、行動経済学で言うところのファスト思考よりスロー思考、そう言った力を涵養する必要性は感じないのだろうか？柔軟で応用の効く知性を授けなければ、生き馬の目を抜くような危機の時代に対応できないだろう。

正解主義の影響は図書館に置かれる本にも及ぶ。例えば、世界各国を取材したシリーズなどを購入する際、授業で取り上げる国の分のみ揃えたりするケースを何度も見てきた。予算の問題もあるのかもしれない。選書する人にとってはそれが正解なのだろう。ただ、ここまで私の文章をお読みいただいた方なら、世界が日本の検定教科書に出てくる国々だけで成り立っているわけではないことは十分にお分かりいただけると思う。多様性は「誰一人取り残さない」というSDGsの根幹をなす重要な概念ではなかったか？図書館にSDGsの本を揃えるなら尚更、ダブルスタンダードではないか？未来を生きる子どもたちには、大国に挟まれた小さな国で懸命に生きている人々に思いを馳せてほしい。もっと想像力を働かせてほしい。切に願う。いつの時代も、人々は世界の片隅で生きていくしかないのだから。

